学校事例 3

個に応じた見取りと指導で生徒の背中を押す

東京都 世田谷区立太子堂中学校

世田谷区立太子堂中学校は、全校生徒81人の小規模校。生徒の数が少ないことをメリットと捉え、生徒一人ひとりの個に応じた指導を徹底している。教師は、生徒の個性や将来の夢を踏まえて、場面に応じた声掛けを工夫することで、生徒の心に火をつけようとしている。

私と生徒とのかかわり方

生徒が将来の夢を描くための手助けをしたい

冨士道正尋校長

担任と生徒の絆を深めるため校長が裏方に徹することも必要

本校は各学年1クラスの小規模校ですが、生徒数が少ないことを弱点と考えず、少ないからこそ出来る指導を目指しています。

私が行うのは、まず生徒全員との面談です。2学期の昼休みと放課後、1日4人ほど校長室に呼び15～20分間、生徒の話を聞きます。たいてい将来の夢を尋ねます。将来何になりたいのか、どのような道に進みたいのか。どんなに現実離れした夢でも、私はまず関心を示し、最後に必ず「応援しているよ」と励ますようにしています。夢がないという生徒には、興味のあることや好きなことを切り口に話を聞きます。今すぐでなくても、将来、生徒が夢を描く際に少しでも後押しになるような話が出来ればよいと考えています。

こうした話は、担任もしていると思いますが、校長と担任とでは、生徒の受け取り方が自ずと変わると思います。それは、立場による生徒との距離感の違いにあると考えます。生徒と触れ合う時間は、担任の方がはるかに多いでしょう。しかし、普段から接点の多い担任や、毎日顔を合わせる保護者からの話がいつも刺激になるとは限りません。普段、話すことのない校長先生との話だからこそ、得られる刺激や充実感があると考えています。

日々生徒と接する担任の先生方が動きやすいように、後方支援をすることも校長の大切な役割です。生徒との面談、登校指導や集会

School Data

◎1947（昭和22）年開校。複数担任制によるきめ細かい指導、国語・数学・英語の基礎学力を身に付ける「学力アップタイム」、英検や漢検の合格を目指す「水曜学習教室」など学力向上に向けた取り組みを積極的に展開。

校長◎ 冨士道正尋先生

生徒数◎ 81人　学級数◎ 3学級

所在地◎ 〒154-0004　東京都世田谷区太子堂3-27-17

TEL◎ 03-3413-0810

URL◎ http://www.setagaya.ed.jp/ttau/

公開研究会◎ 未定

生徒の心に火をつける

などの場面で私が語り掛けることと、普段担任が話していることが違うと、先生方に対する生徒の信頼が薄れてしまいます。逆に、どの先生も言うことが同じであれば、「担任の先生が言っていることは本当なんだ」「先生の言うことを聞こう」という意識が芽生え、自ずと生徒の顔も担任の方に向くようになるはずです。

そのためには、学校の経営方針をしっかり先生方に伝えて、組織全体で共有する必要があります。その方針を実現するために、各分掌・教科がそれぞれの役割を果たしていく強固な組織づくりが欠かせません。教師の個々の力を高めると共に、学校全体で意識をそろえて、生徒を見守る組織力を磨きあげることも校長の大切な役割の1つだと考えます。

先生方には取り組みの意義を生徒に熱く語ってほしい

生徒が意欲を高めるためには、先生方が授業の魅力や学校活動の意義について、なぜ必要なのか、なぜやらせたいのかを熱く語ることも必要です。そのために、私が意識するのは、取り組みの意義を先生方に問い掛けることです。例えば、ある先生が「移動教室でこの施設に連れて行きたい」と申し出た時、私は必ず理由を聞きます。「理科の授業で地層を教えているので火山の実態を見せたい」というのであれば喜んで了承しますが、「去年も行ったから」という理由では却下します。

先生自身が活動の魅力を知っていれば、生徒に「そこに行ったら必ず○○を見よう」「○○があるから触るとよい」と熱く語ることが出来ます。行く前に生徒をわくわくさせて、終了後は「見てきたか」「すごかっただろう」と言って達成感を与える。そうした期待と充実感を与え続けることで、別のものも見たい、こんなことをしたいという意欲に火がつくのです。「毎年やっているから」という理由では、生徒の心は動かないと思うのです。

世田谷区立太子堂中学校校長
冨士道正尋 ふじみち・まさひろ
「自ら課題を見つけ、知識や情報を基に解決できる力、チャレンジする姿勢を育てていきたい」

世田谷区立太子堂中学校
加藤清春 かとう・きよはる
主幹。1学年主任。数学科担当。「自分に足りないことを客観的に把握し、自分を高める姿勢を身に付けてほしい」

世田谷区立太子堂中学校
宍戸弘子 ししど・ひろこ
2学年担任。社会科担当。「努力は絶対に報われることを信じて、チャレンジし続ける生徒を育てたい」

私と生徒とのかかわり方

授業外でも生徒を把握し、個に応じた声掛けを行う

1学年主任／数学科担当　加藤清春先生

「もっとやってみたい」と思わせて授業を締めくくる

私が数学の授業で心掛けているのは、生徒がもっとやってみたいと思わせるような投げ掛けをして締めくくることです。「この問題には実はこんな解き方もある」というように、発展的な内容を少し話し、余韻を残して授業を終える。いつもうまくいくとは限りませんが、中には興味をかき立てられ、授業後に質問に来てくれるようになる生徒もいます。

数学が苦手な生徒のために、デジタル教材も活用しています。特に生徒が喜ぶのは、線が自動的に動いて図形を作るような機能です。「この後どうなると思う?」と想像させるだけで生徒はわくわくします。期待を高めてじらしたあげくに、ボタンを押して図形を動かす。デジタル機器をうまく活用することで、生徒はより授業に積極的になり、知らず知らずのうちに理解も深まります。

普段の生徒との会話が授業の成否にかかわる

日頃からどれだけ生徒とコミュニケーショ

ンが取れているかも、生徒のやる気を高める上で欠かせない視点です。生徒が解答に苦戦している時、単に分からないという場合もあれば、何かの悩みを抱えていてやる気が出ないから解けないということもあります。状況に応じて生徒への声掛けや対応も変えていかなければなりません。

その時、的確な声掛けをするためには、授業中の生徒の姿だけを見ていたのでは不十分です。ささいなことでも、出来るだけ普段から声を掛け、コミュニケーションをする機会をつくることが大切です。

前任校で、授業を担当していない生徒にも声を掛けていたら、ある生徒から卒業時に、「先生に話し掛けてもらえたのがうれしかった」と書かれた手紙をもらいました。いろいろな先生に見守られているという思いは、勉強に対するやる気にもつながってくるのではないでしょうか。逆にいわゆる荒れた学校に勤務していた時には、授業中、注意ばかりして、多くの時間を生活指導に割いていました。学習が進まないばかりか、授業自体が後味の悪いものになっていたのです。私自身、むなしいですし、生徒ももっと授業を受けたいという気持ちにはならないでしょう。

当たり前のことですが、やはり普段から生徒をしっかり見て、生徒一人ひとりを理解することが大切なのだと実感します。生徒の内面を知った上で注意するのと、表面的な行為だけを見て注意するのでは、生徒の態度は全く異なり、指導の効果も変わります。

今後も、生徒一人ひとりの個性に応じたきめ細かい指導を心掛けながら、生徒の好奇心を高めるような授業を工夫していきたいと思います。

私と生徒とのかかわり方

成功体験の積み重ねが生徒の意欲を継続させる鍵

2学年担任／社会科担当　宍戸弘子先生

体験から得た自信が意欲を生み新たなチャレンジへ向かわせる

生徒の意欲を高める上で大切なのは、成功体験の積み重ねだと思います。それが最も実現しやすいのは学校行事です。自分のためだけではなく、みんなのため、クラスのために頑張って達成感・充実感を得る経験を積み重ねることで、物事に取り組む意欲を育み、かつ継続していけるのではないでしょうか。

行事では、生徒の主体性を重視します。行事の成功を最優先とし、担任主導で進めると、生徒が受け身になり、かえって行事は活気のないものになってしまいます。生徒自身がやり遂げたという達成感を持って終わらせることが、次の取り組みへの意欲を育むのです。

行事を成功させるためには、結果よりも過程が大切だということも、生徒にはよく話します。体育祭のMVPを決める際も、華々しい結果を残した生徒ではなく、裏方でコツコツ働いていた生徒の姿や陰の努力を必ず紹介するようにしています。

それは行事だけではなく、普段の生活にも言えることです。行事の結果は、毎日の生活の積み重ねの結果です。授業や家庭学習も含めて、普段の生活が整っていなければ、仲間と協力して何かを成し遂げようという意欲も湧かず、自信を持って前に進むこともできないでしょう。

「継続は力なり」「努力は報われる」と教師が言うだけでは、生徒は実感が湧かないかもしれません。そこで、「先輩たちを見てごらん」と言うのです。例えば、先輩がどれだけ努力をして第1志望校合格を実現したのかという話は、生徒たちも耳を傾けます。

体験から得た自信が意欲を生み、新たなチャレンジへ向かわせる。そういうサイクルの積み重ねが、学習に対する意欲を高め、卒業後も目標に向かってひたむきに努力する素地をつくるのではないでしょうか。

生徒の心に火をつける

学校全体の取り組み
一人ひとりの課題に応じたきめ細かい指導を徹底

小中接続教材を導入し中学校への期待感を高める

同校のほとんどの生徒が、太子堂小学校の卒業生だ。そこで、両校は小中接続の取り組みを続けている。

その1つは、太子堂中学校独自の接続教材『太中への道』だ。小学校6年間で学んだ内容の復習から、中学校生活の決まりごと、各教科の勉強方法、予習・復習の方法までを網羅した生活と学習の手引きだ。進学前に配布し、中学生としての心構えを養うのがねらいだ。2012年度に始めた取り組みで、初年度は太子堂小学校の教師が復習問題を作成した。13年度は区の予算を得て、小学校側の負担を減らすために学校外の事業者に作成を依頼した。

「小学校を卒業し、春休みは気が緩む時期です。中学校に上がる前に小学校の復習をして、入学前の心構えを整えてもらおうというのがねらいです。小学生にはプレッシャーになるかもしれませんが、良い意味での緊張感はあった方がいいと思っています」（冨士道校長）

課題は、大半の生徒が入学前に提出する。生徒にとっては、小学校から中学校へとステップを上るという良い刺激になっている。一方、教師にとっては、課題の取り組み状況を見て、入学前にある程度、生徒の学力が把握できるため、導入期の指導もスムーズに行えるメリットがある。

個々の学力に応じた個別指導で分かるまで教える

生徒のやる気を持続させ、学力向上を図るために、同校では個別指導にも力を入れている。

学力が極端に低い生徒、何らかの事情で学習が遅れている生徒に対しては、個別指導を行う。一斉授業と同じ時間帯に、該当の生徒は空き教室に行き、同じ教科について専任の教師からマン・ツー・マンで指導を受ける。指導するのは同校の教科担当の他、近隣の大学の学生ボランティアや世田谷区から派遣された講師で、週単位で学年・教科ごとにスケジュールを組んで実施している（**写真**）。

冨士道校長は、「授業が分からないまま3年間、教室の椅子に座り続けるのは、生徒にとって苦痛以外の何ものでもありません。一斉授業では付いていけない生徒も、マン・ツー・マンなら気軽に質問し、分かるまで説明してもらうことが出来ます。表向きは『嫌だ』と言っている生徒も、付きっきりで見てもらえることが内心、うれしいようです。授業が分かれば、生徒は学校に来たくなります。そうした救いにつながるような取り組みを、出来る限り実践していきたいと考えています」と話す。

小規模校の特徴を最大限に生かして、きめ細かい指導で生徒の意欲を持続させる太子堂中学校。こうした教師たちの地道な努力の積み重ねは、生徒の学校生活満足度80％という高い数字にも表れている。

写真　3年生の個別指導の時間。学生ボランティアと区から派遣された講師の2人が、生徒にマン・ツー・マンの指導に当たっている